

顧問

野村雍夫

妊娠とくに早期の初回妊娠が乳癌の発生に保護作用があることが動物実験や疫学的調査で確かめられています。乳腺の上皮細胞の基になる幹細胞（ステムセル）は非妊娠の女性では発癌刺激に感受性が強いのですが、妊娠により抵抗となることがマウスで最近発見されました。若年の妊娠は乳癌リスクを低下させることが知られていますが、多くの国で妊娠年齢が遅くなるか妊娠しない傾向にあるときに、10代または20代初めで妊娠せよという提案は不可能でありましょうか。その代わりに一時的なホルモン操作による偽妊娠が乳腺上皮細胞に保護的な効果を示すと考えられ、米国で乳癌リスクの低下が可能なことが示唆されました。

食事習慣やライフスタイルも乳癌リスクに影響します。体重減少や脂肪摂取の低下がエストロゲンレベルを減少し、乳癌リスクを低下します。しかし、ダイエットによる体重制限や脂肪の制限は長期間必要であり、10年以上続けることはほとんど不可能です。

酒、タバコとの関係はどうでしょうか。53件の飲酒と乳癌リスクの試験の総合解析では、アルコール摂取は明らかに乳癌リスクを上昇しました。タバコは乳腺細胞のDNAを傷つける可能性があります。疫学的研究でははっきりしません。いずれにせよ、食事習慣やライフスタイルを変えることは容易でなく、これにより乳癌の発癌を抑えることは困難でしょう。

最近では、大豆イソフラボンなどの植物性エストロゲンに関心が集まり、テレビでの捏造問題までありました。植物性エストロゲンは植物に由来するフラボノイド様化合物で、構造的または機能的にエストロゲンに類似し、ステロイドでないにもかかわらずエストロゲン活性をもちます。植物性エストロゲンはエストロゲン活性のために腫瘍形成性と抗腫瘍活性が報告されていますが、生体内の環境により反対の抗エストロゲンとして働くことがあります。大豆のイソフラボン、茶のカテキン、ブドウや赤ワインに含まれているレスベラトロール、ブドウの種子のアントシアニンなどのポリフェノールが化学予防効果があると主張されています。これらは、試験官内で乳癌細胞の増殖を刺激または阻害したという報告が多くあります。そのいくつかはネズミの乳癌の発癌を抑制するという報告があります。

イソフラボンがヒト乳癌の化学予防として有用である可能性があっても、その種類、使用量、投与期間、閉経前後などの因子、また消化管での吸収率、代謝・排泄率などに個人差があり、エストロゲンとして働くか、抗エストロゲンとして働くかは不明です。また、アジア地域での大豆の消費と乳癌リスクに関する試験で、大豆の消費量の増加とともに、乳癌のリスクが低下したという報告がありますが、無関係であったという報告もあります。さらに、植物性エストロゲンがヒトにおいて乳癌の発癌を予防したという大規模な試験は行われていません。したがって、ほとんど全ての健康食品と同じく、イソフラボンが乳癌を予防するという証拠はありません。

今回は実際に抗エストロゲン剤が乳癌の発癌を抑制したというお話をします。